

○佐藤悦子^{*} 梅澤絹子^{*} 小林茂雄^{**}

(*上越教育大、 **共立女大)

〈目的〉着脱の調節機能を明らかにするための基礎的資料を得る目的から、健康者の着脱動作を取りあげ、前大会ではスカートの明き部位の違いが着脱の所要時間に有意な時間差のあることやファスナー開閉の際にどちらの手で操作されるかを明らかにした。本報ではパンツ形態としてジーンズを取り上げ、着脱時の動作特性と着用感について検討を行った。

〈方法〉被験者は健康な女子学生30名とした。実験に用いたジーンズはシルエット上すそ幅の異なるものとして4タイプを用い、着脱動作を行わせた。動作測定は人工気候室(温度24℃、湿度50%RH設定)において行い、ビデオ撮影により動作過程を観察した。動作終了後、4タイプの着用感とシルエットイメージについてSD法21項目で評価させ、動作の総合評価として“着脱しやすい”を順位法で評価させた。また、下肢の動作特性を検討するために日常生活の諸動作10項目における足の使われ方を質問紙によって回答させ、着脱動作時の使われ方と比較し考察した。

〈結果〉1)動作の所要時間は、着衣動作において有意な時間差が見られた。脱衣動作では、すそ幅の最も狭いタイプに有意な時間差が見られ、他の3タイプ間には有意差は見られなかった。2)ジーンズを“はき始める足”“脱ぎ始める足”は衣服の影響は見られずいつも同一側が使われ、着脱ともに同じ側または着衣と脱衣で開始足が異なる群に分かれた。3)SD評価における4タイプの着用感評価では、被験者を体型上から3群に分類し、各体型のプロフィールから、「心地よい」「はきやすい」「落ち着きの良い」「タイトな」の項目に評価の違いが見られ、また“着脱しやすい”の順位評価においても違いが見られた。